

巻 頭 言



佐々保雄
日韓トンネル研究会会長
北海道大学名誉教授

日韓トンネル研究会が生れて、間もなく満3年になろうとしている。その間、委員の方々及び会員諸氏の御協力によって、多くの研究や調査が行われて来た。その経過については、季刊の「時報」に、また得られた成果については「研究」誌に述べられている。

関連地域の陸上部の地形や地質に関しては5千分の1縮尺の準精査的資料が既に得られているし、海域については2万5千分の1の地形図や音波探査によする海底地形図も描かれている。これに基づいて、目下、路線の選定や工法も検討されつつあり、それによって、本年は、より精細な調査に入ろうとしている。

その間、問題は枚挙に暇が無いが、全区間をトンネルになると200軒を越す長大なものとなり、幅広な海峡部には高さ100米を越す人工島も必要となろうし、その一部を橋になると50軒を上回る長大橋となる。また、対馬西部海域の軟弱層をどう突破するかも特段の研究を要する。

いずれも今までの常識からすると「超」の字のつく世紀の大工事となり、知識と技術の莫大な集約、想像外の経費と月日を要することを覚悟せねばならない。

しかし、それが世界平和、将来の背骨、ユーラシア大陸ハイウェイの出発点であり、その成否がことの運命を決することを知れば、我々の責務の重さに身のしまる思いである。しかも、これこそ日本の世界への貢献の最たるものになることを悟るならば、身命をかけても惜しくないと思わざるを得ない。

願わくは、同志の輪が、日韓のみならず、世界に広がり、共通の目標として、相協力する日の近いことを、それを踏台として道は更に西に延び、多くの国々と結ばれんことを、物と身の頻りな行き交いが、やがて人々の心の交わりを齎らすことを、それがいつの日にかの平和に続くこと、それが本会の使命と感ずる昨今である。